

かゆい戸所に手がとどく // 保育現場の超具体的安全戦略!



第12号 「やけど」を予防する



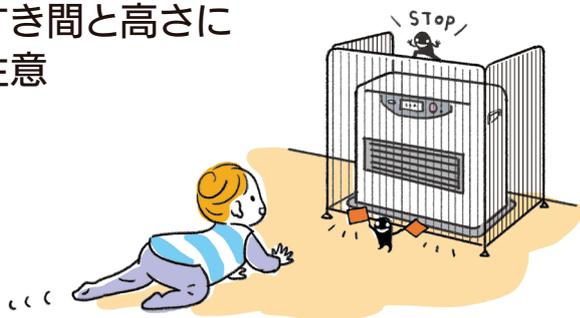
環境のなかにある「やけどの危険」、見つかりましたか？
 今月は、やけどの原因を子どもから遠ざける環境づくりです。

所 真里子



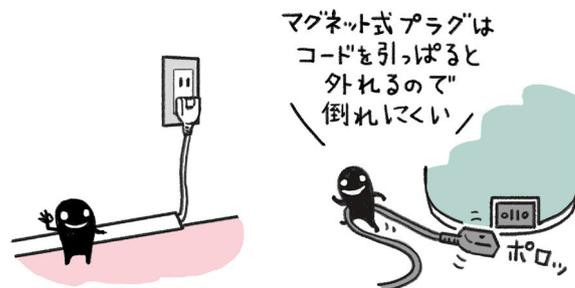
日本子ども学会常任理事、ISOガイド50(子どもの安全の指針)JIS原案作成委員会委員、保育の安全研究・教育センター設立メンバー。家政学修士(日本女子大学)。子どもの安全の専門家として研修講師、調査研究等を行っている。

ストーブガードはすき間と高さに注意



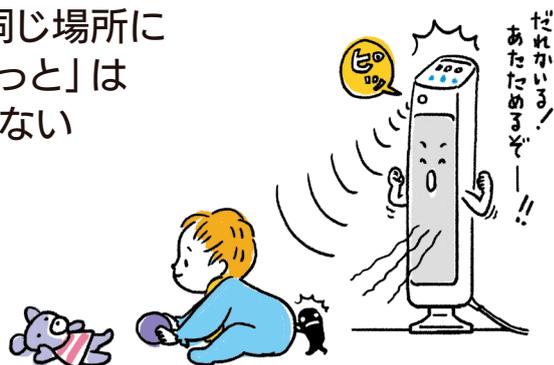
1歳児の平均的な手の厚みは16mm。ガードの数センチのすき間でも手が入り、ストーブや温風が出る場所に触れてしまうことがあります。また、2歳児の平均的な肩までの高さは約60cmですので、これより低い高さのガードでは上から手を入れてしまいます。ガードをつけたら、すき間や上部から手を入れてみて、熱源に触れられないかどうかを確認してから暖房を使い始めましょう。

電源コードは壁か床に固定する



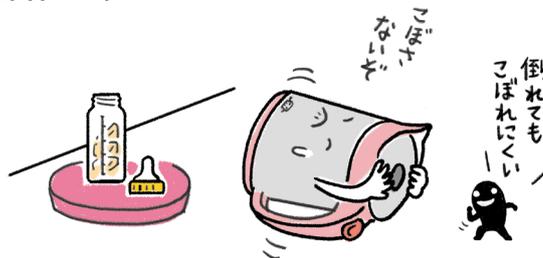
暖房器具の電源コードは、つまずきの原因になります。つまずくことでコードが引っ張られ、暖房器具が傾いたり倒れたりする危険があります。足が引っかからないようにカバーなどで壁や床に固定する、あるいはマグネット式プラグの製品を選んでください。なお、電源コードは無理に曲げたり踏みつけたりすると断線して火災の原因になります。コードの配置に悩んだら、電化製品等の専門家に相談することをお勧めします。

「同じ場所にずっと」は危ない



自分で姿勢を変える力が十分でない月齢の子どもは、熱くても逃げることができません。人感センサー付きのヒーターで熱風を浴び続け、やけどをした事例もあります。最近の暖房器具は性能がよく、離れた場所まで温風が届きます。心地よい温風も、肌にあたり続けると子どもは皮膚が薄いので、やけどになることも。ホットカーペットや床暖房の上で寝かせることや、温風ヒーターの近くで遊ばせることは避けましょう。

倒れた時の危険を考えた製品があります



どんなに気をつけていても、暖房器具や熱湯の入ったポットなどを倒してしまうことをゼロにはできません。たとえば、倒れたら止まる暖房器具、倒れたり傾いたりした時に中のお湯がこぼれにくいポット、倒れた時に中から熱湯が出ない加湿器があります。チャイルドロック機能など、器具にどんな安全対策がついているか、取扱説明書を読み、活用してください。